



ケインズ卿の訪問

国際通貨基金(IMF)75周年の記念日に、偉人が過去から現れる。

アティッシュ・レックス・ゴッシュ

「身分証は？身分証を見せて」

スリーピースのスーツとストライプ柄のネクタイを品良く着こなして到着した初老の男性が呆然と見返すと、守衛は大げさにため息をついた。「どなたですか？お名前は？」

「私はケインズだが。ジョン・メイナード・ケインズ。ケインズ男爵だ」

「いやいや、ケインズ男爵だろうが、男爵芋だろうが、身分証を見ないことには建物の中に入れちゃ駄目なんです」

無名の国際通貨基金(IMF)職員がこの2人の横を小走りで通り過ぎる。仕事に遅刻しているのだ。しかし、彼は突然立ち止まって、ぐるりと引き返してきた。「ケインズ博士ではないか！」理事会議室に置かれたブロンズ製の胸像からケインズの顔に見覚えがあつた職員は、「守衛さん、すみません。この方は私がご案内します」と職員証をかざしながら言った。

2人の後ろ姿に向けて、「訪問者用バスを必ず手配してくださいね」と守衛が声を発する。

職員がケインズを案内しているのはIMFの本部ビルである。「ケインズ卿、どうぞおかげください。私の方で…」

「私の訪問は予定に入っていたのですか？電報が届いてなかったのでしょうか？」

「えっと、残念ながら、そうだと思います。専務理事室に電話をかけてください。きっと彼らの方でしっかり対応してくれることでしょう」

「いや、私は少し時間に遅れているのです。言わずもがなですが、アメリカの列車は時間通りに動いた試しがない…」と不満そうにケインズはハードレザーのベンチに腰掛けた。ロビーに並んだ数多くの旗に少し目がくらんだ様子である。

職員が戻ってくるまで20分近くかかった。「専務理事ですが、今から是非お目にかかりたいそうです」

「ご親切にどうも。専務理事のお名前は？」

「ラガルドです。クリスティーヌ・ラガルド」

「クリスティーヌ？女性ですか？フランス人女性？」

職員はこくりと頷いた。

「えっと、では、専務理事に次ぐ地位には我タイギリス人の同胞が就いているということかな？」

「筆頭専務理事はデビッド・リptonですが、アメリカ人です」

「ああ、やっぱり、アメリカ人か。けれど、筆頭専務理事の次はイギリス人でしょうね？イギリスのクオータが2番目に大きいのですから！この点、私は自分で交渉したので間違いないはずです」

職員は、申し訳なさそうに咳をして「実は、クオータが今2番目に大きいのは日本です。中国とドイツが続きます」と伝え、慰めるように「イギリスのクオータは5番目に大きく、フランスと同じ大きさです」と付け加えた。

ケインズは、この事実をまさに咀嚼しようとしているところで、専務理事室に入るよう案内された。

「ケインズ卿、お会いできて、とても光栄です」

「マダム・ラガルド、初めまして」

「お迎えの手配がもっと上手く整っておらず、たいへん失礼いたしました。正直に申し上げると、お越しになるとは思っていなかったもので…」

ケインズはかすかな微笑みを浮かべて「ええ、そうでしょうとも。昔『長期的にみると…』とも申し上げました²が、私がその長期的な状態になってからしばらく経ちますからね。けれど、IMFが75回目の誕生日を迎えた今日、改めての訪問をどうしても我慢できなかったのです」

ラガルドはケインズをソファへと促して、ネスプレッソの方へと軽やかに歩き、コーヒーを2杯準備し始めた。

「ところで教えてもらいたいのですが、IMFは成功だったのでしょうか。これまでに、どんなことが起きましたか？ブレトンウッズ会議から今までに、いくつか変化があつたと理解していますが」とケインズは言った。

「一体全体、どこからお答えしたら良いでしょう…。本当に多くのことが変わりました」とラガルドは答える。

「それでは、国際通貨基金協定はどうでしょうか。どの言葉ひとつとっても交渉には本当に骨を折りました。きっと手付かずのままでしょう？」

「全体的には、確かに変わっています。しかし、いくつか改正がなされました」

「例えば？」

「ひとつ目の改正は特別引出権(SDR)の創設です。これが何かと言うとですね…複雑なのですが、中央銀行間の架空の通貨だと考えてください。必要な時に国際通貨制度に流動性を供給するのです。2009年に大規模な配分が行われました」

「私が考えていたバンコールにそっくりですね！」

ラガルドは笑う。「そう、本当にそっくりです！忘れていました。特別引出権の仕組みについてケインズ博士にご説明する必要はなかったですね。それでは、他に何があるでしょうか？もうひとつ大きな変化としてはふたつ目の改正が挙げられるかと思いますが、この改正によって変動為替相場が正当化されました」

「変動為替相場！ですが、IMFの設立は、戦間期に混乱の極みを見せた外貨為替相場の安定化こそが目的でした」

「固定為替相場のブレトンウッズ体制は1970年代前半に崩壊したのです」

「それでは、なぜIMFは閉鎖されなかつたのでしょうか？」

「ええ、世界はそれでもIMFがまだ必要だとすぐに理解しました。くわえて、変動為替相場制でも、IMFは加盟国諸国が通貨を操作して貿易面で不当な利益を得ないように為替相場政策をしっかりと監視しているのです」

「そうでしたか。加盟国はIMFの意見を聞いてくれるのですか？」

ラガルドは少し笑って「まあ、多分、いつもではないですが」と認める。「アメリカはいつも黒字国が自国通貨高にならないようにしていると不満を言っていますね。かつてはドイツと日本、ここ最近までは中国が主犯格でした。数年前に、私たちはサーベイランス(政策監視)というIMFの最も根本的な役割に関してまで『居眠り運転中だ』と批判³を受けました」。

「おっと、私はハリー・デクスター・ホワイトに当時、伝えたのですよ。IMFが黒字国に調整を迫る能力を君は制限しようとしている、と。私は黒字国にも赤字国にも同じように罰則を設けたかったのです。けれど、ホワイトとアメリカ財務省の連中は強力に抵抗したのです。私はホワイトに『ずっと黒字国でいられるわけではない。赤字国になった時に後悔するよ』と警告しました。ホワイトは当時、よく言っていました。『問題ないさ、アメリカはいつの時代になんでも自由貿易を推進していくから』と。この点、多分に今も変わりませんよね？」

「ええ、まさしく」とラガルドは皮肉っぽく答えた。

「では、中央銀行はもう外貨為替市場に介入しないのですね？」

「変動為替相場であれば、介入しませんね。介入してはいけないことになっています。市場の混乱時は除きますが」

「市場は常に混乱していませんか？」

ラガルドはコーヒーマシンからエスプレッソを取り出そうと立ち上がったが、その瞬間に突然、別の考えが思い浮かんだ。コーヒーマシンへと向かう代わりに、壁の木製パネルに隠された小さな冷蔵庫へと歩き、シャンパン「ラ・グランダム」のボトルを取り出した。

『偉大な女性』とは、なんとこの機会にぴったりなボトルでしょう!とケインズは笑う。「お聞きになったに違いありませんね…。私が人生で唯一後悔していることを⁴」彼は立ち上がってラガルドの方へと向かう。

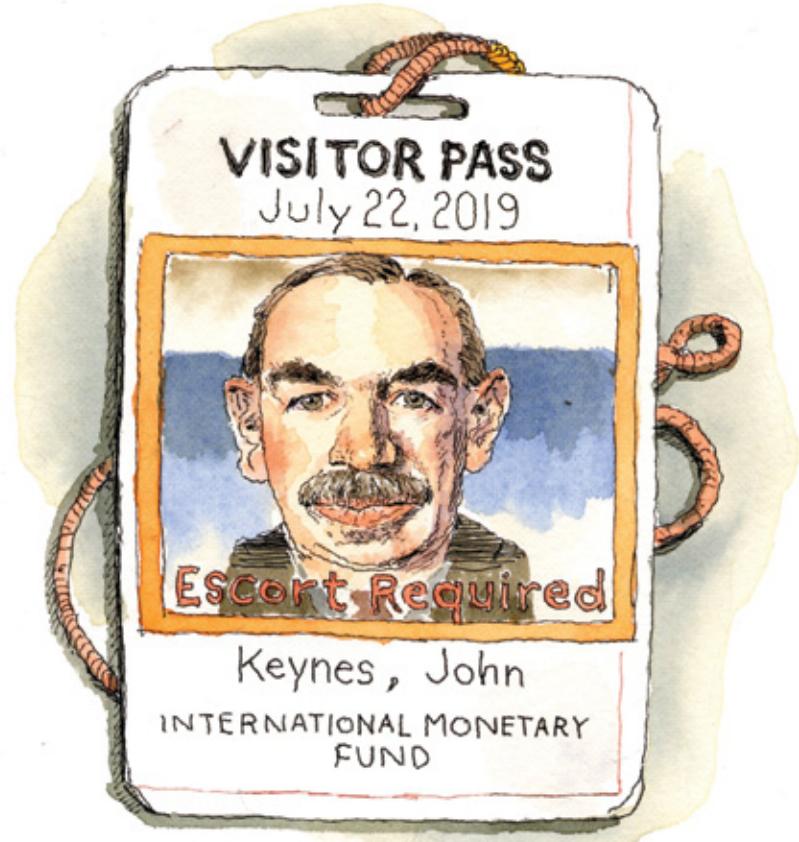
「このボトルは私がIMFに来た初日に見つけたものです。特別な機会のためにと思って取っておきました。今日がまさに特別な日でしょう」とラガルドは微笑んでケインズにグラスを渡す。

ラガルドとケインズは乾杯をする。ケインズは椅子に深く腰掛けながら「私のバンコールのアイディアがどの程度上手くいったか教えてください。その名前は何でしたっけ?特別引出権?数年前に大規模な供給をされたって仰いましたよね。どうですか?」と言う。

ラガルドはケインズの顔を呆然と見つめ、そして「そうでした。世界金融危機のことはまったくお聞きになってないのですね」

「全然です。第2の大恐慌が起ったのですか?」

「いいえ。10年前に起った金融危機は大規模で、大恐慌となりかねないものでしたが、幸運なことに、ケインズ博士の理論から私たちは学んでいたので



す。IMFは主要国による即座の財政刺激策と大規模な金融緩和を推奨しました」

「それで危機は終わったのですか?」

「大体は。それ以降、世界経済は少し不安定です」

「財政刺激策は上手くいったのですか?」

「はい、とても上手く。ですが、政府の歳出が過剰な国もあり、債務水準が高まっています」

「金融緩和はどうでしたか?」

「非常に重要でした」

「でも、その結果、ホットマネーの流入が起こりましたか?それとも、今の時代、資本フロー管理はきっと大きく改善しているのでしょうか?」

ラガルドは肩をすくめる。「巨額の資本が新興市場国と発展途上国に流入し、これらの国々では企業のドルへのエクスポージャーが危険なほどまで大きくなっています」

「生産資本は最善の活用が可能な場所へと移動を許されるべきですが、まったく無制限のホットマネーの流れとなると…」と落胆したケインズは頭を振る。「ホワイトと私は国際通貨基金協定の草案作成時にその点でまったく意見が一致していたのですが、ニューヨークの銀行家が原稿を入手して、それで終わりになってしましました⁵。いずれにせよ、危機は数年前のことでしたね。IMFが今取り組んでいることは何ですか?」

「本当にたくさんの問題に取り組んでいます」とラガルドは答える。「先ほど申し上げたように、世界金融危

機から10年後の今でも世界経済は不安定です。くわえて、私たちは数多くの新しい問題に取り組んでいます。所得格差、さらなる男女平等の推進、地球の気候変動といった問題です」

「気候変動? 天気のことですか? どのように気候が変わるのでですか?」

「世界は毎年、何千トンもの二酸化炭素とその他の汚染物質を排出しています。この結果、平均気温が上がり、氷冠が解け、海面が上昇しています」

「そんなことに! 恐ろしいですね。けれど、IMFとはどんな関係があるのですか?」

ラガルドは解説を始め、もう少しで説明が終わろうとしている時に扉を控えめにノックする音がした。ラガルドのアシスタントが扉の向こうから頭をこちらへ出している。「マダム・ラガルド、数分後に理事会の議長を務める予定になっております」

「またですか?」とラガルドはため息をつく。「わかりました。ありがとうございます。すぐに向かいいます」

ケインズは立ち上がったが、口ひげがぴくりと動いて、微笑みが浮かんだ。「IMFの理事会は非常駐にすべきだと私は常々言っていたのです」

「ケインズ博士、IMFで今日一日、過ごされてみてはいかがですか?」とラガルドは部屋を出る準備をしながら尋ねる。「私のアシスタントがご案内させていただきます。ご自身の目でIMFの仕事ぶりをご確認いただけるでしょう。お帰りになる前に私のところにお越しいただけますか?」

* * *

日が暮れ、ワシントンDCが美しい夏の夕べを迎える時にケインズは専務理事室を再訪した。

「いかがでしたか?」とラガルドが尋ねる。

「何もかもが変わってしまったように思えました。私の時代には、変わらぬものが3つありました。天候、国民所得の労働分配率⁶、そして残念なことですが、女性の社会的地位⁷の3つです。3点ともすべて変化しています。けれど、同時に、何も変わっていないとも言えます。IMFは今も国際収支上の問題に国々が調整できるように支援する必要があり、これを『国内的または国際的な繁栄を破壊するような措置に訴えることなし』に行なうことが求められています。IMFが黒字国と赤字国の中間で調整の公正な負担が実現するよう支援し、資本の流出国と流入国の中間で変動の激しい資本フローを管理する必要がある点には変わりがありません。そして、時には、世界的な流動性を統制する必要も依然として存在しています。唯一変わった点は国々が直面するショックや問題の性質です。しかし、こうした問題に取り組む国々を支えるというIMFの根本的な使命は今も同じです。私たちの真の功績は固定平価制の採用ではなく、加盟国に貢献するた

めに適応する制度の創設にあったのです」

「本当にそうですね」とラガルドが答える。「どうぞ、お見送りしますよ」

2人は物思いにふけりながら、沈黙のままエレベーターに乗った。

「他に何か感想はありますか?」とラガルドはケインズを出口の外へと案内しながら尋ねた。

「ありますとも。人種や国籍、宗教を問わず、男性も女性も、世界共通の利益のために力を合わせて、姿を拝見した時に、IMFを安心して任せられると気づいたのです⁸」とケインズは答えた。そして、彼は微笑んで「そして、IMFを心配なく任せられるなら、世界も心配無用なのです」

軽くお辞儀をしたケインズは向きを変えて歩き始め、IMFの前を走るNW19番街の奥へと姿を消した。

FD

アティッシュ・レックス・ゴッシュは国際通貨基金(IMF)の戦略政策審査局でIMF史を担当。

参考文献

- Adams, Timothy. 2005. "The IMF: Back to Basics." Speech delivered at the Peterson Institute for International Economics, September 23.
- Council of Kings College. 1949. *John Maynard Keynes, 1883–1946, Fellow and Bursar: A Memoir*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Ghosh, Atish R., Jonathan D. Ostry, and Mahvash S. Qureshi. 2019. *Taming the Tide of Capital Flows*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Helleiner, Eric. 1994. *States and the Re-emergence of International Finance: From Bretton Woods to the 1990s*. Ithaca, NY: Cornell University Press.
- Keynes, John M. 1923. *A Tract on Monetary Reform*. London: Macmillan.
- . 1939. "Relative Movements of Real Wages and Output." *Economic Journal* 49 (193): 34–51.

注

¹ケインズの驚きは無理もないことである。1990年の第9次クオータ見直しまでイギリスのクオータがアメリカに次いで2番目に大きかった。1947年で最もクオータが大きかった5か国はアメリカ(31.68%)、イギリス(15.12%)、中国(6.56%)、フランス(6.28%)、インド(4.85%)であった。

²ケインズの有名な発言(1923, 80)として「長期的にみると、我々はみな死んでしまう」がある。

³Adams(2005)。

⁴ケインズはかつて「人生唯一の後悔はシャンパンをもっと飲むなかったことだ」と発言したと言われている(Council of Kings College 1949, 37)。

⁵ Helleiner(1994)とGhosh, Ostry, and Qureshi(2019)の第2章を参照。

⁶ケインズ(1939)は国民所得の労働分配率の安定性について「一連の経済統計の中でも最も驚くべきだが、同時に最も確立された事実のひとつである」と言っている。しかし、1980年代から大半の先進国で労働分配率が低下し続けている。

⁷ケインズは女性の権利の強力な支持者で、1932年にはマリー・ストーブス協会の副会長になっている。

⁸IMF加盟国たる諸政府が同様の法制度を採択するはるか前の1946年9月25日にIMF理事会は規則N-1「IMF職員の雇用、分類、昇進、配属は、いずれの人についても、性別、人種、宗教を理由とした差別なしに行われることとする」を採択している。